素顔

三浦哲郎

朝日新聞社

素顔

定価　九八〇円

昭和五十二年十月三十一日　第一刷発行

著者　三浦哲郎

発行者　角田秀雄

印刷所　共同印刷株式会社

発行所　朝日新聞社　東京・大阪・名古屋・北九州
東京都千代田区有楽町二―六―一

0093-254510-0042

©TETSUO MIURA 1977

素顔□目次

風の道 7
行楽 30
郷里の匂い 52
酒場まで 75
動物誌 111
冬の客 135
内証話 162

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

夜 200
白木蓮 231
木の芽時 259
ひとり旅 283
燈火 309

装画 小松久子
装幀 多田 進

〈昭和五十二年一月二十四日から七月三十日まで朝日新聞連載〉

素顔

風の道

庭の方から、カポネの長く尾を引く声がきこえてきて、馬淵は、机の上にひろげていた地図帳から顔を上げた。

――カポネが歌っている。もうそんな時間なのか。

そう思って出窓の障子を開けてみると、葉を落とした沙羅の梢の隙間から、まだ明るさの残っている夕空に星が一と粒、淡く光っているのがみえた。

馬淵は、四十半ばだが、このところ急に目が衰えてきて、こまかな文字を読むのに苦労している。日が西へ傾くころは、もう机の上の電気スタンドを点けなければならない。その上、辞書をひいたり、細密な地図を調べたりするときは、情けないことに拡大鏡の力を借りなければならない。

そんなふうに、昼間から灯をともした部屋にいて拡大鏡などを覗いていると、外の様子がわ

からなくて、いつもカポネが歌い出すのを聞いては、もう日暮れかと気づくことになる。
歌うといっても、カポネはカナリヤなんぞではない。飼犬の、雄のブルドッグである。これが得意げに喉を震わせて歌うのだ。ブルドッグが歌うといっても、誰も本気にしてくれないが、馬淵の家族は、毎日のようにカポネが歌うのを聞いている。
最初、カポネが歌うことに気がついたのは、下の子の七重であった。七重は小学校の三年生だが、ある日、茶の間でソプラノ笛の練習をしていると、ガラス戸の外で昼寝をしていたカポネがむっくりと起き上って、おかしな声で吠えはじめた。
潰れた鼻先を天に向け、喉を反らせて、大きく裂けた口をガムでも嚙むようにゆっくり動かしながら、
「ごわん、ごわん、ごわんごわんるるるるるう……」
と長く尾を引いて吠えている。
カポネは、番犬だから、塀の外を気に入らない靴音が通ったりすると、声にどすを利かせて吠える。そうかと思うと、腹を空かせて好物の食パンをねだるときなど、仔犬のように甘えた声で吠えたりするが、こんなふうに、お話に出てくる狼の遠吠えを真似たような吠え方をしたことは、いちどもなかった。しかも、おかしなことには、笛を吹くのをやめるとカポネも吠えるのをやめるが、また吹き出すと、すぐ一緒に前とおなじような吠え方をする。
ちょうど土曜日の午後だったので、七重の注進で家族がみんな茶の間の濡れ縁に集まった。なるほど、誰が笛を鳴らしても、カポネはごわんごわんと声を喉で転がすようにして、長々と吠える。その様子は、吠えるというよりも、ソプラノ笛に合わせて歌っているとしか思えなか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

った。
それ以来、子供たちは珍しがって、何度も笛を鳴らしては歌わせていたが、そのうちに、カポネは笛がなくても自分から歌い出して、家族の気を引くことをおぼえた。
夕方、茶の間の庭先にきて歌うのは、そろそろ散歩の時間ですよという催促である。
(きょうの当番はどっちだろう。珠子か、志穂か)
カポネがいつまでも歌っているので、馬淵はそう思いながら拡大鏡を地図帳の上に置いた。円くて厚いレンズのなかで、ポルトガルとスペインの国境あたりの川筋や、ちいさな町々の名が、鮮明になった。
当番というのは、カポネを散歩に連れ出す当番のことである。その当番は、長女の珠子と次女の志穂が引き受けているが、一日交替で、何曜日は誰ときまっているわけではないから、きょうの当番が誰なのか、いきなりでは馬淵にもわからない。
(きっと志穂だ。志穂はテレビに夢中で、カポネの歌声が耳に入らなくなっているのだ)
志穂は中学の一年生だが、まだ小学生気分が抜けなくて、七重がみている夕方のテレビマンガに、つい引き込まれてしまうことがある。
馬淵は、ついでに夕刊を読んでくるつもりで仕事部屋を出ると、中庭を見下ろす廊下の窓から、
「カポネ、わかったよ。もうすこしの我慢だ」
と声をかけて置いて、階下へ降りた。
妻の菊枝が忙しそうに夕食の支度をしている台所を素通りして、茶の間を覗くと、七重だけ

が膝小僧を抱いてテレビをみていた。ガラス戸の外では、相変らずカポネが歌っている。
「志穂は？」
と台所を振り返って訊くと、
「まだです。きょうはクラブがあるから」
菊枝は、手を休めずにそういった。志穂は体操部に入っていて、火曜日以外は毎日放課後に練習がある。
「ずいぶん遅くまでやるんだな」
「そうかしら。時間的には、そう遅いってほどじゃないけど。日が短くなったから、そんな感じがするんでしょう」
そうかもしれないが、帰りは大丈夫か、と彼は思った。
「志穂に、なにか御用？」
「カポネが呼んでるから。当番じゃないのか」
「きょうは珠子。きのうが志穂だったから」
「珠子は？」
「珠子もまだなんです。学園祭の後始末とかで、すこし遅くなるんですって。高校も二年生になると、いろいろとすることがあるらしいの」
カポネはもう二歳半で、肩幅広く、胸は厚くがっしりしていて、スクラムを組んだラガーのように前へ進む力が滅法強い。七重の力では、まだまだ心許ない。
「じゃ、ひさしぶりにいってくるか」

彼がそういって、着替えをしに歩きかけたとき、茶の間のテレビの上の電話が鳴った。菊枝が、割烹着で手を拭きながら調理台を離れて、受話器を取った。

「……え？　痴漢？」

不意に、菊枝は、ちいさく叫ぶようにそういった。

どんな家庭にも、べつにそれを禁句ときめているわけではないのに、普段、家族同士の会話ではほとんど口にすることがないという言葉がある。

外では、よく見たり聞いたりする言葉なのだが、それが、ある家庭のなかには入ってこない。よその家庭ではありふれた日常語の一つかもしれないが、どういうものかその家庭には縁がなくて、家族の会話にはほとんど顔を出すことがない——そんな言葉だ。

そんな馴染みのない言葉が、あるとき、なにかの拍子に家族の誰かの口から飛び出したりすると、みんなはびっくりする。まるで、なにか見馴れない小動物が、不意に家のなかへ飛び込んできたかのようにびっくりする。

馬淵は、まず、だしぬけに妻の口から飛び出した痴漢という言葉そのものに、びっくりした。痴漢などという言葉は、これまで家族は誰もあからさまに口にしたことがなかったのだ。

彼は、立ち止まって、みるみる険しくなっていく妻の顔を見守っていた。七重も、テレビの前で膝小僧を抱いたまま、きょとんと母親を見上げている。

「……で、いま、どこにいるの？　どこから掛けてるの？」

菊枝は、急き込んでそう訊いている。その口調から、相手は珠子か、志穂だとわかった。

「……わかったわ。すぐいくから、そこにいて。そこを一歩も動いちゃ駄目よ」

菊枝はそういって受話器を置くと、吐息をする暇もなく、首のうしろに両手を廻して割烹着の紐をほどきながら、
「珠子が痴漢に襲われたんですって、そこの道で」
怒ったようにそういった。
彼は、改めて胸を衝かれた。
「そこの道って？」
「すぐそこの、川べりの道」
「で、いまどこにいるんだ、珠子は」
「中学校へいく道の、煙草屋さんにいるんですって。そこの赤電話から……」
菊枝は、割烹着をもどかしそうに両腕からむしり取ったが、下は珍しく帯をはずして、伊達巻きだけになっていた。菊枝は、ちいさく舌うちした。
「こんなときに限って……。でも、いいわ。七重、お母さんの茶羽織持ってきて」
七重は、無言で弾かれたように立ち上ると、奥の部屋へ駈けていって茶羽織を持ってきた。
「そこの川べりの道で……そんなら、どうして中学校の方の煙草屋までいったんだ？」
馬淵は、自分でも気づかぬうちに、仕事着の帯をほどいていた。
「わからないわ。逃げていったんじゃないかしら」
「逃げるなら、家の方が近いじゃないか」
それには答えずに、菊枝がさっさと玄関の方へいくので、
「待てよ。僕もいく」

と彼はいった。

——どうしてこんなことになったんだろう、珠子が痴漢に襲われるなんて。

彼は、のぼせたような頭でそう思いながら、脱いだ仕事着を客間のソファに抛り投げ、内玄関へ走って、そこの壁に掛けてあるズボンを手早く穿いた。それから、下着のシャツの上に、じかに厚手のジャンパーを着ようとして、

——俺は一体、なにをしているのだ。

と気がついた。

そのズボンもジャンパーも、いわば彼の作業着で、けれども家で作業らしい作業はほとんどしたことのない彼は、もっぱらカポネの散歩についていくときにだけそれを着ることにしていた。それで、ズボンにもジャンパーにも、カポネの匂いが染み込んでいて、とりわけズボンの方はカポネの毛やよだれにまみれていた。

けれども、自分はこれから、カポネと一緒に散歩に出ようとしているのではない。近所の火事場へ駈けつけようとしているのでもない。日が暮れると淋しくなる通りの、煙草屋の店先に立ち竦んで震えている、長女を助けに出かけるのだ。

そんなら、なにも、こんな薄汚れた作業着に着替えることはないではないか。なるべく早い方がいいのだから、仕事着の帯を締め直して、下駄を履いて駈け出せばよかったのだ。一体なにをしているのだ。

そう気がついたが、もう半分着てしまったのだから、仕方がなかった。彼は、ズボンのポケットから靴下を引き出すと、玄関で七重に留守をいいつけている妻の声を聞きながら、急いで

履いた。
「いい？　誰がきても、開けちゃ駄目よ」
「はい」
「ちい姉ちゃんが帰ってくるかもしれないから、そのときはちゃんと声を確かめてから開けてよ」
「わかった」
「カポネがいるんだから、大丈夫ね。淋しくないわね」
そこへ、ついでに黒いコールテンの帽子までかぶった彼が出ていくと、
「あら、カポネを連れていくんですか？」
と、咎めるように菊枝はいった。
「いや……なんとなくね、こんな恰好の方がいいような気がしたから」
彼がそういいながら散歩用の靴を履いていると、菊枝は、ちょっとの間、目をみはるようにしていたが、やがて一つ、大きく息を吸い込んで、なにもいわずに外へ走り出ていった。
家の前の路地を出ると、すぐ川べりの道に突き当る。あたりはもうすっかり暗くなっていて、乾いた川べりのアスファルト道路だけが仄白くみえている。
前をゆく妻の下駄の音を急ぎ足で追いながら、彼は、川へ落ちる下水の水音がいつもより高いという気がした。
川といっても、都会の住宅地を流れている幅五、六メートルの薄汚れた水路で、両岸を車が二台やっとすれ違えるほどのアスファルト道路が走り、ところどころにちいさなコンクリート

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com